

九州の万葉集と風景画シリーズ（第六回）

「齊明天皇ゆかりの地と万葉集」

【御陵山（恵蘇八幡宮）】

西鉄大牟田線「朝倉街道駅」から「杷木行」の西鉄バスに乗り約1

時間のところにある「恵蘇宿（朝倉町）」バス停で下車、前方約40

0m歩くと筑後川北岸に沿って「恵蘇八幡宮」（福岡県朝倉町大字山

田字恵蘇宿166）がある。この神社の裏山が、日本書紀に「西暦6

61年5月、齊明天皇は百済救援のため朝倉橘広庭宮に遷られた

が、病のため7月24日に崩御された。皇太子中大兄皇子は母齊明天

皇崩御7日後の8月1日に御遺骸を橘広庭宮からこの地に移し、一時

的に葬り・・・」と記されている齊明天皇御遺骸の仮埋葬された地（朝

倉橘広庭宮伝承地から約3kmの地）に仮定されており、地元ではこ

の山を「御陵山」と呼んでいる。（朝倉町史）

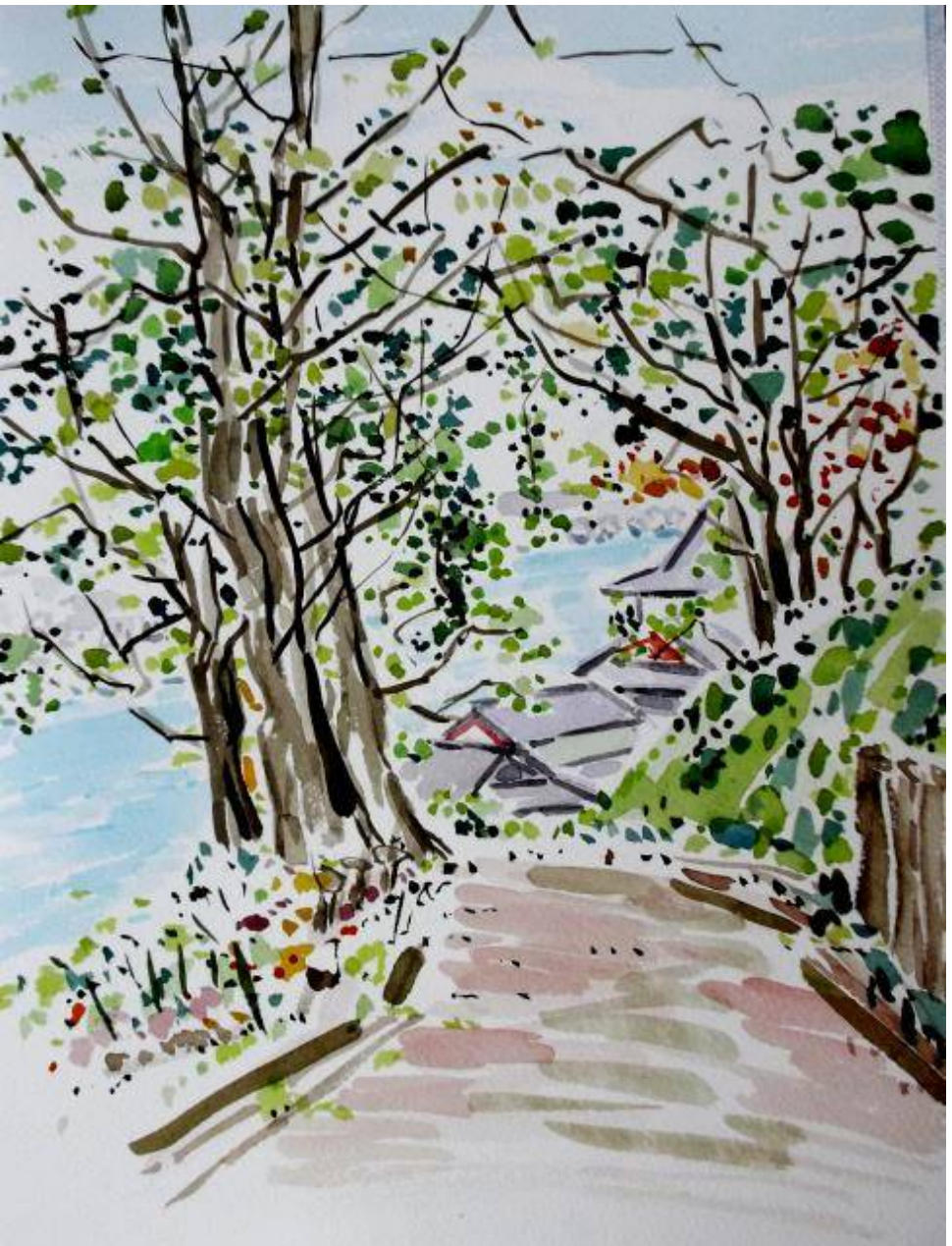


「恵蘇八幡宮本殿」から裏山へ長い石段あるいは横地の急坂を上がると約70mの山上に斉明天皇の御陵といわれる古墳（恵蘇八幡宮1，2号墳）が石柵に囲まれてある。

皇太子中大兄皇子はこの地に斉明天皇の御遺骸を一時的に葬り軍を進め、後に奈良県高市郡高取町へ移されたと記されている。

【写生地1・御陵山】

「御陵山」山上付近の斉明天皇仮埋葬地に仮定される「恵蘇八幡宮古墳」横地の坂道から眼下に阿蘇山を水源地とし有明海に注ぐ大河・筑後川と山田の民家を描く（杏花）



☐ 「斉明天皇と朝倉橋広庭宮」

・4世紀の末、朝鮮半島は百済・高句麗こうくり・新羅しらぎの三国に分割され、以降7世紀に至るまで和戦を繰り返していたが、斉明6（660）年7月、百済はついに新羅・唐の連合軍に滅ばされた。

・「日本書紀」によると今から1,350年余前の斉明6（660）年10月に百済から、かつてから親交関係のあった日本に救援軍派遣の要請があった。

・斉明天皇は斉明7（661）年1月、中大兄皇子以下多くの朝臣を従えて百済救援軍派遣のため同年3月なのおおつ 娜大津（博多）に着き、いわせのあんぐう 磐瀬行宮（娜大津付近にあったとの説あり。）に入り、同年5月に博多から朝倉橋広庭宮に遷り、百済救援のための大本営とされたのである。

・「朝倉橋広庭宮」がどこにあったか、現在のところ判明していないが、所在地の有力な候補地として福岡県朝倉郡朝倉町須川の地（博多湾から南へ約40kmの地）を朝倉宮があったとする説があり現在、朝倉町須川には「朝倉橋広庭宮伝承地」の碑が建っている。

・日本書紀には斉明天皇は「斉明7（661）年7月24日に朝倉宮で崩御」と記されている。斉明天皇の朝倉宮滞在期間は僅か76日間

で御年68歳の波乱に富んだ生涯を終えたとある。

四万葉集には斉明天皇の筑紫と関係のある歌はないが齊

明天皇の作との説がある次の歌がある。

山の端はに あぢ群騒むらさわき 行くなれど

我わは寂さぶしえ 君にしあらねば

卷四―四八六

(解説) 山際をあじ鴨の群れが乱れ飛んで行くが、その声を聞いても私の心は楽しまない。懐かしいあの方ではないから。

四作者については題詞に「岡本天皇の御製一首併せて短歌(二首)」と

あるが、短歌二首目左注に「いま考えてみると高市岡本宮(舒明天皇)

と後岡本宮すぢ(斉明天皇)との二代二帝はそれぞれ別である。ただ、

岡本天皇とだけいふのはどちらを指すのかが明らかでない」との趣旨

が述べられている。

☐この歌の作者は歌意から見て斉明女帝が夫であった舒明

天皇への挽歌（死を悼む歌）であったとする説もある。

（万葉集（一）〜新潮日本古典集成より）

（註）「高市岡本宮」は奈良県高市郡明日香村岡に舒明二（630）年に造営された第三十四代舒明天皇の宮と比定されている。同地は大化の改新（645年）の舞台となった板蓋宮伝承地でもある。同所には高市岡本宮から浄御原宮が営まれたと推定されている。斉明天皇の宮である「後岡本宮」は前記、舒明天皇の岡本宮跡に斉明二（656）年に造営されたと推定されている。（「神々と天皇の宮都」から）

【写生地2・伝飛鳥板蓋宮跡】

いたぶきのみや

明日香村岡にある複数の宮殿遺跡（①舒明天皇の「岡本宮」②皇極天皇の「板蓋宮」③齐明天皇の「後岡本宮」④天武天皇「浄御原宮」きよみかはら）と背景に甘櫨丘をあまかしのおか描く。

（池田杏花）



(参考文献)・角川日本史辞典・神々と天皇の官都をたどる 高城修三著、

・万葉集(二) 新潮日本古典集成・朝倉町史・夜須町史 等